

Title	看護師・介護士におけるエンディングノートの認識
Author(s)	辰巳, 有紀子; 森, 理圭
Citation	大阪大学看護学雑誌. 2019, 25(1), p. 46-53
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71341
rights	©大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

看護師・介護士におけるエンディングノートの認識

Recognition of Nurses and Caregivers about “Ending-note”

辰巳有紀子¹⁾・森 理圭²⁾Yukiko Tatsumi¹⁾, Rika Mori²⁾

要 旨

本研究の目的は看護師と介護士がエンディングノートをどのように認識しているかを捉えることである。

看護師・介護士を対象とし機縁法で対象者を募集した。看護師・介護士 99 名に研究説明書、同意項目付きの無記名の質問紙を配布し、その場もしくは後日回収ボックスで回収した。86 名の回答（有効回答率 86.9%）を看護師と介護士に分けて分析した。本研究は大阪大学臨床研究審査委員会の審査を受け承認された。

調査の結果、7 名を除く 79 名（91.8%）がエンディングノートという名前を聞いたことがあったが、エンディングノートを見たことがある人は 22 名、実際に書いたことがある人は 3 名のみであった。エンディングノートを書くことを患者に勧めたいと考えていたのは、エンディングノートを書くことで、自分自身の老後や死後への不安が軽減されるという考えと、葬儀や遺産の対応に困らず、親族の役に立つという考えであった。対象者の多くがエンディングノートの内容、意義を知っており患者にも勧めたいと考えるものの、実際に書いた人は少数であり、患者のケアに活用されていない実態が明らかになった。

キーワード：看護師、介護士、エンディングノート、人生の最終段階

Keywords : nurse, care worker, ending-note, end-of-life

1. 人生の最終段階をどのように過ごすか

近年医療界においては、世界的にパターンリズムからの脱却が進み、インフォームド・コンセントを十分に行った上で、自己による意思決定と意思表示が進んでいる¹⁾。

厚生労働省は 2007 年、終末期医療及びケアの在り方とその方針の決定手続きに関して、「終末期医療の決定プロセスに関するガイドライン」を発表した（2018 年 3 月に「“人生の最終段階における医療”の決定プロセスに関するガイドライン」と改称）²⁾。この中では、人生の最終段階における医療・ケアは【本人による意思決定】を基本として進めることが、最も重要な原則であり、本人の意思が確認できない場合は【家族による推定意思】を尊重するとされている²⁾。そして、その準備として、それぞれ人生の終わりまでをどのよう

に過ごしたいか、特に医療やケアに関する希望について前もって考え、繰り返し話し合い、かかりつけ医や家族と共有しておく取り組み、アドバンス・ケア・プランニング (Advance Care Planning: 以下 ACP) の作成が勧められている。命の危険が迫った状態になると、70%以上が医療・ケアなどを自分で決めたり、望みを人に伝えたりすることが出来なくなる³⁾。事前に人生の最終段階についての考えを意思表示しておくことが、突然の事態であっても、本人の希望に近い人生の最終段階における医療・ケア実施のための大きな手掛かりになる。

では、人生の最終段階に関する希望は、その段階が差し迫ってから考えれば良いものなのだろうか。この点に関しては、エンド・オブ・ライフケアについて早期から話し合うことが、実際の人

¹⁾大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻、²⁾大阪大学医学部附属病院

¹⁾ Osaka University Graduate School of Medicine, Division of Health Sciences, ²⁾ Osaka University Hospital

生の最終段階の QOL に大きく影響するという指摘がある⁴⁾。また、ここでいう「早期」が誰のいつを指すかという点について、スタンフォード大学大学院医学研究科は、【国民全員が健康なうちから】、【人生の最終段階の医療に関する希望や思いなどを明確に文章化した上で医療者や家族・友人らと話し合い共有すること】とし、Stanford Letter Project を推進している⁵⁾。

Stanford Letter Project で使用されるテンプレートには、人生の最終段階の医療や介護に関する希望や思いだけでなく、自分の趣味や大切にしていること、自分史などについても書く欄がある。ACP (Advanced Care Planning) がその性格から医療・介護面に限定的であるのに対し、Stanford Letter Project では他者と共有した方が、良いとされる情報が幅広い。

日本では、古くから死後のことについて、あらかじめ意思を表明しておく「遺言」を書く文化があった。また近年ではエンディングノートが数多く出版されており、人生の最終段階に関して意思を示す手段がある。特にエンディングノートはStanford Letter Project と同様、自分史や大切にしていることを記載できること、入手しやすさ、書式や形式に制限がなく自由に記載できる点が優れており、高齢者に静かに浸透してきている。エンディングノートの内容は、多岐にわたり出版物によって異なるものの、人生の最終段階における医療や介護についての意思を示す欄がある。

エンディングノートを書く作業の中で、記載者は自分史を振り返り、来る病や死、医療や介護について具体的にイメージを高め、思考を整理し時間的展望を描くことができるのである⁶⁾。この作業をしておくことで、突然の事態であっても人生の最終段階において、本人の希望に近い医療・ケア実施のための大きな手掛かりになる。

2. エンディングノートの浸透

1) エンディングノートの認知度の上昇

経済産業省は 2011 年 8 月、「ライフエンディング・ステージ」に関する報告書を発表した⁷⁾⁸⁾。この報告書では、エンディングノートについての調査結果が報告されている。それによると、エンディングノートをよく知っている／何となく知っている／名前だけ聞いたことがあるとした割合が 30 代以上の国民 (n=4181) の全体では 63.5%、60 歳代では 66.4%、70 歳代では 76.6%

であったと報告している。なお厚生労働省の調査では、ACP の認知度が一般で 22.5%、看護師 56.3%、介護職員 47.6%であったと報告されており、単純に比較はできないが、国民の認知度は ACP よりエンディングノートの方が高い。

また経済産業省の調査では、全体の 46.1%がいずれエンディングノートを作成したいと回答していた⁷⁾⁸⁾。しかし実際に作成しているのは最も高い 70 歳以上で 5%、60 歳代で 2.4%、最も低い 30 代では 0.8%に過ぎなかったという。人生の最終段階に関する思いや意思の表示をするツールが、身近にあることを国民が認識し、書きたいと思う人も多い一方で、実際には、ほとんど記載されていない状況が見て取れる。

2) エンディングノートを書くための専門職者による知識や支援の提供の必要性

木村¹⁰⁾はエンディングノートに関する高齢者の認識についてインタビュー調査を行った結果から、高齢者が、エンディングノートを書きたいのに実際には取り組まない理由を示している。それによると、高齢者が暗い将来や、病気に苦しんだり介護を受ける自分を想像したり、考えたりしたくないと考えていること、ある一定の希望は有しているが、それを的確に表現するのが難しいと感じていることがあるという。言い換えれば、高齢者が、エンディングノートを記載しようとしたときに、暗いイメージだけにとらわれず具体的な知識を提供したり、現実的な内容の記載を勧めたりする、専門職者による知識や支援の提供が必要であるといえる。同時に、エンディングノートを書くための知識や支援の提供をしている側からの、実際に作成されたエンディングノートの内容に現実味がないという指摘もみられる¹¹⁾。

これらのことから実際の人生の最終段階における医療に、エンディングノートを活用できるツールにすることを考えると、高齢者ケアに関わる医療の専門職者、すなわち看護師・介護士が知識や支援の提供をすることで、高齢者が、単に暗いイメージしかない人生の最終段階について、具体的に考え意思表示するなど、準備することができる。例えば人生の最終段階を過ごす場所、病名や余命の告知、延命治療、臓器提供、献体、介護時の経済的な側面(介護保険の利用)等について記載するエンディングノートも多く、これらの項目について具体的に説明し、本人の意向を表示する補助をすることである。

しかし、高齢者ケアに関わる看護師・介護士において、エンディングノートが、どの程度認知されているか、エンディングノートを実際に見たり書いたりした経験があるか、そのうえで、患者にエンディングノートを書くことを勧めたいものだと思っているかどうか、それに影響する考えについての実態調査は、これまでほとんど行われておらず、現状を明らかにする必要がある。

3. 目的

本研究では高齢者ケアに関わる看護師・介護士がエンディングノートをどのように認識しているかを捉えることを目的とする。

II. 研究方法

1. 高齢者ケアに関わる看護師・介護士を対象とした2回の調査手続き

1) 高齢者介護施設で働く看護師・介護士に対する調査

研究者の縁故により、高齢者介護施設で働く看護師・介護士が集合する講習会（「介護施設でのターミナル期の意思決定支援と看取りケアセミナー」、「施設看護師に求められる役割と看護・ケアの視点セミナー」）において、講習会主催責任者に了解を取った上で、質問紙調査への協力を参加者に依頼した。

具体的には、講習終了後、参加者全員（2日間計74名）に研究説明書、同意項目付きの質問紙（無記名）を配布した上で、研究の概要と目的、方法と倫理的配慮について、研究説明書に沿って十分に説明した。同意項目により研究参加への同意が得られた場合、その場で時間を取り回答してもらった。その場での回収であったため、調査が強制でないこと、参加の可否により何ら不利益を被ることは無いことを繰り返し説明した。

なお講習会への参加は登録制であったことから、看護師・介護士の参加人数の概要は予め把握することができた。対象者数は看護師が多く介護士が少ないと予想された。そのため、介護士については以下の調査も予定し実施した。

2) 小規模多機能ホームで働く介護士に対する調査

研究者の縁故により、広島県にある小規模多機能ホームAにて、施設長の了承を得た上で調査を行った。介護士25名に対し、研究説明書、同意項目付きの質問紙（無記名）を配布した。回答

ボックスを用意し、同意・回答を得た場合、そのボックスに回答用紙を入れていただき、施設の協力の下、郵送で回収した。

2. 調査内容

個人の属性（性別、年齢、職種、居住地域、勤続年数、現在の勤務先形態）、エンディングノートに関する認識（先行研究^{5) 7) 8) 10)}を参考に作成）についてたずねた。

【具体的な項目】

(1)エンディングノートという言葉を知ったことがあるか

→よく知っている、どちらかという知っている、名前だけ聞いたことがある、まったく知らない

(2)エンディングノートを実際に見たことがあるか

はい→どこでエンディングノートを見たか

(3)エンディングノートを実際に行ったことがあるか

はい→きっかけは（自由記述）

(4)エンディングノートを書くことの効果:4件法(0~3点)

・自分自身の老後や死後の不安は軽減されると思うか

・自分の親族が葬儀や遺産の対応に困らず、親族の方の役に立つと思うか

・自分の親族の悲しみが軽減されると思うか

(5)患者にエンディングノートを書くよう勧めたいと思うか:4件法(0~3点)

3. 分析方法

2(1)~(5)の回答の分布について記述統計を行った。また(5)に影響を与える考えについて分析をするため、SPSS Statistics Base 25.0を用い(4)を独立変数とし(5)を従属変数とした重回帰分析を行った。

4. 倫理的配慮

本研究は大阪大学医学部附属病院倫理審査委員会の承認を得て実施している。本研究の参加は任意であり、研究への参加・不参加、途中で回答をやめても不利益はこうむらないことなど必要事項を文書にて説明し、質問紙の冒頭に同意をたずねる項目を設定した。

Ⅲ. 結果

1. 対象者の属性

1 か所目では 67 名（回収率 90.5%）の回答を得、現役学生の 2 名を除く 65 名を分析対象とした。2 か所目では、21 名（回収率 84%）の回答を得た。6%の回収率の差は、研究体制の限界により回収方法を統一できなかったことが、影響していた可能性がある。以下、全調査の対象者 86 名を看護師と介護職に分け分析を行った。対象者の内訳は表 1 の通りであった。

表 1 対象者の内訳

	平均年齢±SD (範囲)	性別	平均勤務年数 ±SD (範囲)	勤務場所
看護師 (n=41)	48.1±11.2 (30-71)	女41 男0	17.3±10.8 (3-42)	介護福祉施設22名 (53%) 大学病院を含む病院6名(14%) クリニック4名 (10%) それ以外9名 (22%)
介護士 (n=45)	49.3±12.4 (22-70)	女39 男6	9.2±8.2 (2-40)	特別養護老人ホーム6名(13%) グループホーム4名(9%) 介護老人保健施設3名(6.6%) それ以外31名(69%)

2. エンディングノートに関する認識

1) エンディングノートの認知度

エンディングノートという言葉を知っているかという設問に対し、よく知っているとしたのは看護師 10 名 (24.4%)、介護士 6 名 (13.3%)、どちらかという知っているとしたのは看護師 17 名 (41.5%)、介護士 12 名 (26.7%) であった。全く知らないという人は看護師で 3 名 (7.3%)、介護士 4 名 (8.9%) であった (図 1)。以下、よく知っている、どちらかという知っていると回答した対象者を「エンディングノートを知っていると対象者」として扱う。

2) エンディングノートを実際に見たことがある割合

2. 1) でよく知っている、もしくはどちらかという知っていると答えた看護師 27 名、介護士 18 名のうち、エンディングノートを実際に見たことがある人は、看護師 14 名 (51.9%)、介護士 8 名 (44.4%) であり、両者半数程度であった。エンディングノートを実際に見たことがあると回答した人が、エンディングノートを見た場所の内訳は、看護師では、書店で見たという人が最も多く (10 名 (71.4%))、介護士は、終活等に関するセミナー・講座で見たとしていた人が最も多かった (3 名 (37.5%))。

さらにエンディングノートを見たことがある人の中で、エンディングノートを書いたことがあるかを問うたところ、あると回答したのは、看護師 3 名 (7%) のみであり、介護士では 0 名 (0%) であった。書いたきっかけは自由記述から、自身の死を (身近に) 感じたからとか、両親や兄が亡くなり、そろそろ必要になると思ったといった個人的に死を身近に感じ、エンディングノートを書く必要性を感じたことがきっかけになった人 2 名 (4.6%)、病院に勤務し本人・家族・医療者が悩む場面から自身の意思を明らかにする必要性を感じたから、という職務上の必要性を感じたケースが 1 名 (2.3%) であった。

3) エンディングノートを書くことがもたらす影響

(1) エンディングノートを書くことが、自分自身の老後や死後の不安にもたらす影響

2. 1) でよく知っているもしくはどちらかという知っていると答えた計 45 名 (看護師 27 名、介護士 18 名) に対して、エンディングノートを書くことが、自分自身の老後や死後への不安を軽減するかどうかたずねた。その結果、強くそう思う、どちらかというと思うという回答が合計 31 名 (79.5%) に上った (図 2)。

(2) エンディングノートを書くことが、自分の親族が葬儀や遺産の対応に困らず、親族の役に立つかどうかにもたらす影響

エンディングノートを書くことが、自分の死後、親族が葬儀や遺産の対応に困らず、親族の役に立つかどうかについて、強くそう思う、どちらかというと思うという回答が合計 37 名 (84.1%) となり、エンディングノートを書くことで、遺族の役に立つと考える看護師・介護士が多いことが分かった (図 2)。

(3) エンディングノートを書くことが遺された親族の悲しみにもたらす影響

エンディングノートを書くことが、自分の死後、遺された親族の悲しみを軽減するかどうかについてたずねたところ、強くそう思う、どちらかというと思う回答が合計 29 名 (72.5%) に達し、一方で、どちらかというと思わない、全くそう思わないという回答が 11 名 (27.5%) であった (図 2)。この結果から、看護師・介護士はエンディングノートを書くことが、遺族の悲しみを軽減すると考えていることが分かった。

3. 患者にエンディングノートを書くことを勧めたい程度とそれに影響を与える考え

1) 患者にエンディングノートを書くことを勧めたい程度

2.1) でエンディングノートを知っているとした45名に、エンディングノートを書くことを患者に勧めたい程度についてたずねたところ、強くそう思う、どちらかというと思う肯定派が27名(84.4%)を占めた。エンディングノートを勧めたいと全く思わない人はいなかった。

実際にエンディングノートを書いたことのある3名は全員「どちらかというと思う」であった。

2) 患者にエンディングノートを書くことを勧めたいという動機に影響を与える考え

エンディングノートの効果に関する3つの項目を独立変数、患者にエンディングノートを書くことを勧めたい程度を従属変数として、重回帰分析を行った。その結果、「自分自身の老後や死後の不安が軽減される」($p=0.005$) および「親族が葬儀や遺産の対応に困らず、親族の役に立つ」($p=0.008$) の2項目のモデルがエンディングノートを書くことを勧めたい程度を有意に説明していたが、「遺された親族の悲しみを軽減する」($n.s.$) は有意ではなかった(表2)。つまり、エンディングノートを書くことの効果として、自分自身の老後や死後の不安を軽減し、また親族が葬儀や遺産の対応に困らず、親族の役に立つと考える人が、エンディングノートを書くことを患者に勧めたいと考えていた。

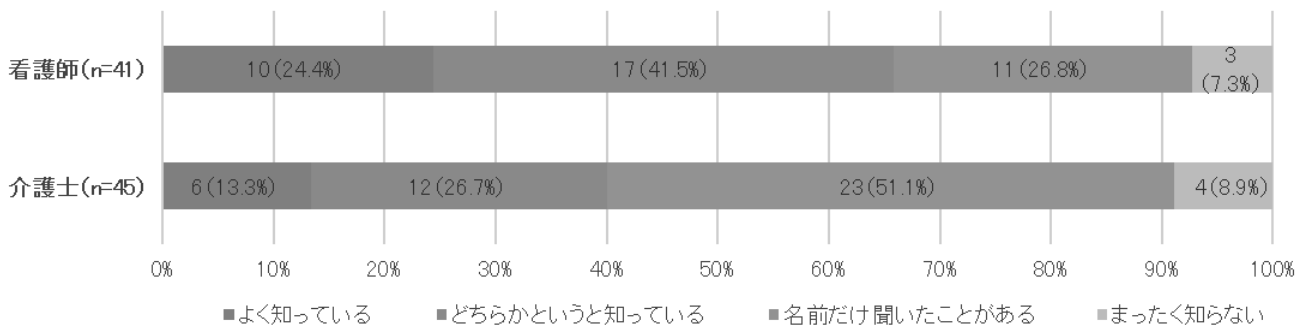


図1 看護師・介護士のエンディングノートの認知度

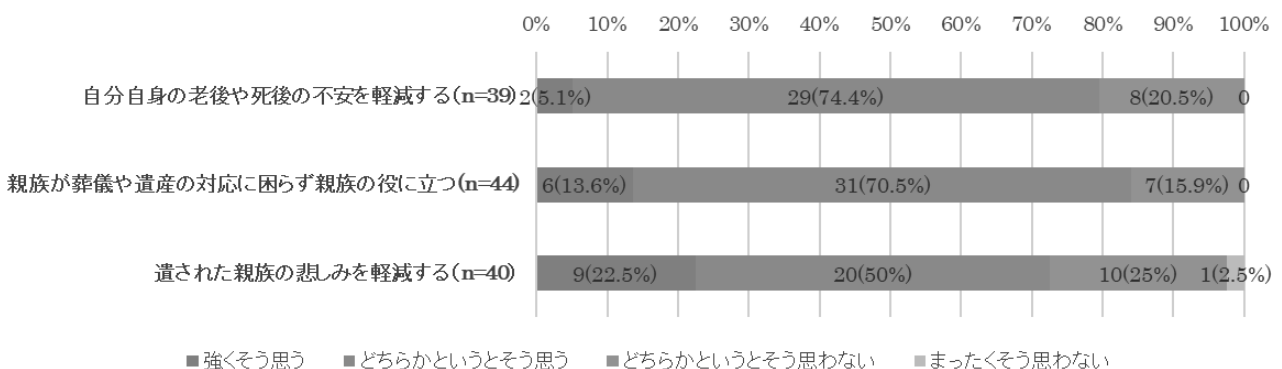


図2 エンディングノートを知っている人のエンディングノートの効果についての考え

表 2 エンディングノートを書くことを勧めたいという考えに影響を与える、
エンディングノートを書くことの効果についての考え

項目	モデル1			モデル2			モデル3		
	B	標準誤差	β	B	標準誤差	β	B	標準誤差	β
自分自身の老後や死後の不安が軽減される	0.66	0.22	0.52**	0.61	0.19	0.48**	0.61	0.20	0.48**
葬儀や遺産の対応に困らず親族の役に立つ				0.50	0.17	0.44**	0.50	0.18	0.44**
遺された親族の悲しみを軽減する							-0.01	0.12	-0.01
R^2	0.27			0.19			0.00		
F変化量 (自由度)	9.24** (1,25)			8.46** (1,24)			0.01 (1,23)		

** 1%水準で有意

IV. 考察

1. 看護師・介護士におけるエンディングノートの認知度

背景で述べたように、一般国民における知名度は ACP よりエンディングノートの方が高い。今回の調査では、ほとんどの対象者がエンディングノートの名前だけ聞いたことがあるとした。厚生労働省の調査は ACP についてであり、本研究結果と一概に比較はできないものの、看護師・介護士においてもエンディングノートがよく知られていることが示された。

2. 看護師・介護士におけるエンディングノートを書いた実態

今回の調査では看護師 31 名 (75.6%)、介護士 39 名 (86.7%) もの人が、エンディングノートを書きたいと回答していたが、実際書いた人は全体で 3 名 (すべて看護師 41 名 (7%)、介護士では 0 名 (0%)) であり、先行研究における高齢者の調査より低かった。対象者が若く、自らの End-of-Life が、まだ遠い未来ととらえられていることが影響した可能性がある。

一方、今回の調査でエンディングノートを書いたことがある人もいた。エンディングノートを書いた 3 名の動機は、死を身近に感じた経験の影響 2 名、および職務上の経験の影響 1 名であった。木村 (2015) は、前者の 2 名が動機とした「死の経験」は、高齢者においても、エンディングノートを書く動機となり得ることを指摘している¹⁰⁾。近親者を亡くしたり、自分自身の来るべき死に現実味を感じたりすることで、自分自身の死を身近

なものにとらえ直し、意味の解釈を試みた結果、エンディングノートを書くことにつながったというのである。いわば、自分の未来に End-of-Life・死が来ることを現実的にとらえた場合に、エンディングノートを書くという行動につながり得るということである。前者の 2 名は専門職者としての経験が、エンディングノートを書く動機につながったわけではなかったといえる。

残りの 1 名は、職務上本人・家族・医療者の悩む姿を見て、自分の意思を明らかにしておくことが重要と考え、エンディングノートを書いていた。言い換えれば、職務上の経験をきっかけとし、エンディングノートを書きたいという考えが促進されていた。そして自分の人生の最終段階について、あらかじめ考え、意思を明らかにしておくことで、End-of-Life に関わる関係者ら (家族、医療者) が必要以上に悩むことを防ぐと考えていた。これは「他者への配慮」といえるだろう。木村ら (2015) は、高齢者がエンディングノートに取り組んだ目的として、他者 (親族等) に迷惑にならないように備えておくためという「他者への配慮」と答えたと報告している¹⁰⁾。つまりこの 1 名は、職務上の経験をきっかけとし、他者に配慮して、エンディングノートを書くことに至ったといえる。

エンディングノートを書いたことがある対象者がいた一方で、ほとんどの対象者は、書いたことが無かった。本調査対象者は介護施設で働く看護師・介護士が中心であり、死に関する経験、意思決定に際し、家族や医療者が困る状況に遭遇する機会は多いとみられる。対象者の中でエンディ

ングノートの認知度が高かったことから、実際書いた対象者が、もっと高率でいてもおかしくないが、実物に触れ、書く機会は十分でない実態が明らかになった。

3. エンディングノートを書いた患者に勧める動機に影響する考えと経験

患者にエンディングノートを書くように勧めたいと思うかどうかを問うたところ、8割が肯定的であった。

またエンディングノートを知っているとした対象者において、エンディングノートを書くことを患者に勧めたいという動機に有意に寄与していたのは、自分自身の老後や死後への不安が軽減されるという考えと、葬儀や遺産の対応に困らず、親族の役に立つという考えであった。このことに関し木村(2015)はエンディングノートについて、「他者への配慮」を動機として記載され、他者が困らないよう手立てを講じたことで、他者に迷惑をかける不安からの解放感、安心感、達成感を得られる効果があるのではないかとまとめている¹⁰⁾。本研究においてもエンディングノートを書くことに、こうした側面があることを理解している看護師・介護士が、患者に勧めたいと考えていたととらえることができるだろう。

さらに実際に書いたことがある人は、専門職者としてのきっかけから「他者への配慮」を動機とした人もいたが、専門職者としてではなく、一個人として、死を身近に感じる経験を経てエンディングノートが書かれていたことが示された。看護師・介護士が自分自身のエンディングノートを書く経験は、高齢者がエンディングノートを書く際にどのような点で困るかを理解する1つのきっかけとなる。個人的な経験に頼ることなく、看護師・介護士がエンディングノートに触れ、書き、内容を把握する機会を積極的に提供していくことが必要ではないだろうか。

4. これからのエンディングノートの発展の方向性

本研究には、対象者や質問の仕方に偏りがあったため分析方法等に限界があり、結果の一般化は困難であるが、看護師・介護士におけるエンディングノートの認識について明らかにすることができた。今後、エンディングノートに触れ実際に書く機会を増やすため、看護師・介護士を対象と

した研修・勉強会等が求められる。それにより、高齢者がエンディングノートを書く際の知識や支援の提供を得やすい状況を作ることができるのではないか。

エンディングノートは、法的拘束力を持たず、ACPのように具体的な医療場面で用いられるものでもなく、また書く項目が不統一であるため、社会の中での活用方法が定まっていない。しかし、エンディングノートは人生の時間的展望の中で人生の最終段階に関して思考を整理するためのツールなのであり⁶⁾、すべての人が、自分の人生観や死生観に根差した人生の最終段階における医療に対する意思を事前に考え⁶⁾、他者と共有できるような機会として活用するのが望ましい¹²⁾。特に突然の事態であっても、本人の希望に近い人生の最終段階における医療・ケア実施のための準備という側面を考えると、高齢者ケアに関わる医療の専門職者、すなわち看護師・介護士が、エンディングノートを書くにあたっての専門的な知識や支援の提供をし、高齢者が意思を表示できるよう、環境を整えていく必要があると考えられる。

利益相反

本研究に開示すべき COI 状態はありません。

本論のデータは森理圭の卒業論文の一部として得られたものです。

文献

- 1) Perkins, H. S. (2007) : Controlling Death: The false promise of advance directives. *Annals of Internal Medicine*, **147**(1), 51-57.
- 2) 厚生労働省 (2018) : “人生の最終段階における医療”の決定プロセスに関するガイドライン人生の最終段階における医療・ケアの決定プロセスに関するガイドライン (平成30年3月改訂).
- 3) 木澤義之 (編) (2018) : これからの治療・ケアに関する話し合い—アドバンス・ケア・プランニング—. (平成29年度厚生労働省委託事業 人生の最終段階における医療体制整備事業).

- 4) Eues, S. K. (2007) : End-of-life Care Improving Quality of Life at the End of life. *Professional Case Management*, **12(6)**, 339-44.
- 5) Stanford Medicine Letter Project.
<http://med.stanford.edu/letter.html>
(2018年9月21日閲覧)
- 6) 下島裕美 (2015) : 終末期に向けた思考整理ツールとしてのエンディングノートについて. 杏林大学研究報告, **32**, 1-7.
- 7) 経済産業省 (2012) : 安心と信頼のある「ライフエンディング・ステージ」の創出に向けた普及啓発に関する研究会参考資料.
- 8) 三菱UFJリサーチ&コンサルティング (経済産業省平成23年度委託事業) (2012) : 安心と信頼のある「ライフエンディング・ステージ」の創出に向けた調査研究事業報告書.
- 9) 厚生労働省 (人生の最終段階における医療の普及・啓発の在り方に関する検討会) (2018) : 人生の最終段階における医療に関する意識調査報告書.
- 10) 木村由香, 安藤孝敏 (2015) : エンディングノート作成にみる高齢者の「死の準備行動」. 応用老年学 第9巻第1号, 43-54.
- 11) キーライフジャパン (2018)
<https://momenaisouzoku.net/blog/エンディングノート/せっかく書いたエンディングノートの内容が実現/>(2018年11月閲覧)
- 12) 黒田寿美恵, 佐藤豊子 (2008) : 終末期がん患者の選択する生き方とその本質. 人間と科学 県立広島大学保健福祉学部誌 **8(1)**, 89-100.